

健康・スポーツ系科目の魅力

アクティブラーニングによる社会人基礎力の育成

松井 克典*

(2017年8月30日受理)

Attractiveness of health and sports classes
Fostering fundamental skills of social workers through Active Learning

Katsunori MATSUI

(Received August 30, 2017)

1 はじめに

2006年に経済産業省¹⁾は、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力として「社会人基礎力」を提唱した。同省では、「大学等の教育現場では、学生たちが将来活躍する社会、産業界等に目を向けられた場が変わっていくことが期待され、また、教育活動においては『教える』視点だけでなく、『学生自身にいかに関与させ、考えさせるのか』という課題にしっかりと取り組んでいかなければならない」と示しており、大学授業においては、この社会人基礎力を育成するプログラムを作為的に導入し、学生に多様な力を育成することが必要である。

この社会人基礎力を育成するために、健康・スポーツ系科目でアクティブラーニングを授業に導入している。これまでも健康・スポーツ系の授業においては、健康の保持増進や体力の向上という大命題を踏襲しながらも、社会人基礎力が潜在的に育成されるとされてきた。そもそも、授業形態が講義形式とは異なるため、アクティブラーニングの要素を多分に含んでいる。しかしながら、これまでの多くの健康・スポーツ系授業が、「アクティブ」な要素は含んでいるものの、スポーツの技術や戦術の修得や単にゲームによるチームワークの確立などに留まり、社会人基礎力を意識した授業の形態は多くはなかった。

本活動報告では、これまでの健康・スポーツ系科目の目的に加え、アクティブラーニングをより積極的に取り入れ、授業のあらゆるところに仕掛けをつくり、学生の社会人基礎力の育成に取り組んでいることについて報告する。

2 社会人基礎力とアクティブラーニングが必要な背景

2.1 現在の学生の気質の考察

大学は学生を教育する機関である。教員は、預かる学生が生まれてから、どのような社会背景の中、成育・成長を経てきたのか、また現代の学生の考え方や行動の仕方を十分に理解しなければならない。これに基づいて指導法や教授法を考え、学生の学修意欲や能力に応じて対応していく必要がある。そのために、以下のような、現在の学生の気質の特徴を大まかにつかんでおく必要がある。

- ①平成時代も29年となり20代以下はすべて平成時代生まれという成長背景。
- ②子どものころから携帯電話、インターネットが当たり前存在していた世代。
- ③何でも与えられ、手に入る便利な時代を生きてきた。
- ④情報はネットですぐに手に入る。そんなに努力しなくても生きてこられたし、潜在的にこれからもそうだと思うている。
- ⑤大学には、入試で受かったからなんとなく来ているという学生も存在。「親に行けと言われたから進学した」や、「すべり止め」で入ってきた不本意入学者も存在している。
- ⑥「子どもを私立大学に進学させられる」という意味では、世間的には「ある程度」裕福な家庭である。
- ⑦奨学金を借りている学生もいる。
- ⑧学力も目的意識も家庭環境も経済力も、多種多様な学生が大学に集まっている。
- ⑨「ひとむかし前」よりも幼くなった学生、からだは大人でも「こころ」は子どもというケースが増えている。

* 共通教育系

- ⑩人との関わりが少ない、人との関わり方が分からない、人と何を話してよいのか分からないと感じている学生が多い。
- ⑪周りで何が起きているか気づかない、他人がどんな思いをしているのか察知できない、自分以外には無関心な学生が多い。
- ⑫親の離別・死別による片親、親の不仲のなか育ったという家庭も少なくない。大人を信じられないという学生もいる。
- ⑬「先生」という存在だけで、「一目置く学生」がいる反面、「偉そうにするなど思っている学生」もいる。
- ⑭「自分のことについて誰かに何かを言われた」ということにもすごく敏感で、自分の考えを生き方の中心に据えることが出来ず、自身に軸がない。

このように現代の学生は、携帯電話や通信型ゲームなどが幼少期から当たり前存在し、他者とのコミュニケーションを必要以上にとらなくても生きてこられた。その結果、人と人とが会話し、考えや気持ちを伝え合うコミュニケーションの機会の不足を生み、また人の気持ちを理解することや表情で察するなどのノンバーバルコミュニケーションが発達していない傾向がある。さらに「筋道立てて計画を立てる」、「何が課題でどのように実行して難題を乗り切る」などの計画力、課題発見力、実行力などが不足している傾向がある。また、様々な家庭環境や経済状況により、ものの見方、考え方が多様化し、自己肯定感の低さや他者を尊重する考えが不足している学生もいる。

このような様々な学生が存在する中で、大学で学び社会に出て、企業や地域、または国際社会の一員として活躍するためには、人と人との関わり方の経験を多く積む必要がある。そのため、学内のあらゆる教育機会に、社会人基礎力を育成するプログラムが不可欠である。

2.2 社会人基礎力

2006年2月に、経済産業省では産学の有識者による委員会において「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として「社会人基礎力」と定義づけた。

これは、3つの能力「前に踏み出す力(アクション)」、「考え抜く力(シンキング)」、「チームで働く力(チームワーク)」、そして12の能力要素として、「主体性」、「働きかけ力」、「実行力」、「課題発見力」、「計画力」、「創造力」、「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」、「ストレスコントロール力」からなる。

2.3 アクティブラーニング

アクティブラーニングとは、瀬上²⁾は「一方向的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味

での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」と定義している。また、文部科学省³⁾では「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」としている。

3 授業での教育活動報告

3.1 授業をする上での考え方

現代の学生の気質を踏まえ、授業をする上での考え方は、「ティーチング」より「コーチング」である。コーチングとは、共感、傾聴、承認、質問を意識的に行い、目標を達成するために必要となる能力や行動を、コミュニケーションをとりながら相手とやり取りをし、その人及び集団の潜在能力や課題の解決策等を自主的・建設的に引き出すことをいう。

3.2 スポーツ授業「テニス」での実践

ここでは、2016年度秋学期(後期)にスポーツ授業「テニス」で実践した授業の報告をする。テニスの授業は平均すると1授業30人ほどの学生が受講している。ラケットを握ることが初めての学生から、現役の硬式テニス部や高校までに競技スポーツとして硬式テニス部に所属して活躍していた学生まで、その能力は様々である。

授業を開始するにあたって、この講座の趣旨を伝えた。そして学生との対話と質問紙を使用し、受講学生のニーズを聞いた。受講学生のニーズは、「思い切り汗を流したい」、「上手い人から教わりたい」、「上手な人と対戦してみた」、「初心者なのでルールや基本動作を知りたい」など、多種多様に及んだ。

まず初めの5回の授業は第1段階として、4つのグループに分け、その日の目標の技術(例えば、フォアハンドのストロークなど)修得のため、グループごとの自由な方法で練習を重ねていく方式をとった。グループの構成は、自己申告制の能力別に4つに分けた。グループ名は上級者から「Advance」、「Semi-advance」、「Normal」、「Rookie」とした。毎時間、ストローク、ボレー、サーブ、ラリー等の基礎的な練習をその日のテーマ・目標に従って活動するという約束をつくり、それを教員、学生の全員で共有した。この段階でのアクティブラーニングはテーマに沿っていけば練習内容や時間配分、人数配置をグループごとに考えさせた。教員の指示はその日のゴールだけを示すことである。各グループの学生たちはリーダーを決め、構成員(フォロワー)の意見を聴きながら内容を決定していく。例えば、初心者グループのRookieは、リーダーから教員のサポートが欲しいという要望があり、ルールやコートの説明、基本動作のコーチングを行った。上級者グループのAdvance

は、基礎的な技術練習は省き、より強い打球が打てるには、また左右の揺さぶりに反応していくにはなど、発展的な内容の練習を行っていた。そして、授業の最後に再びグループミーティングを行い、個人の感想や意見を話し、ふり返りを行った。最後に全体集合をし、そのグループのリーダーは今日の練習の内容と工夫した点を、全体に発表し、他の班がどのように取り組んでいるのかを知り、授業全体で共有した。

次の5回は第2段階として、グループを解体し、再編成をした。第1段階で「Advance」にいた上級者を講師役とし、学生が学生を教える。ここでもリーダーとフォロワーが生じ、より実践的な練習や上級者が初心者を教える、あるいは能力の異なる学生同士がコートに入りラリーをしたり、簡易試合を行った。ここでも練習開始時のミーティングで、順番や練習方法、人数配置、ローテーションの方法など決め、各グループに任せた。終了時のミーティングでは各自感想や意見を述べた。同じく、最後にそのグループのリーダーは今日の練習の内容と工夫した点を、全体に発表し、授業全体で共有した。

最後の4回は試合を行った。能力別にリーグ戦を行い、最後に優勝者を決めていく本格的なものである。ここでは、この授業のまとめとして能力を発揮する場として設けた。ここでは、リーグ戦で戦った者同士、あるいはダブルスでペアを組んだ者同士でペアディスカッションを行い、ゲームのふり返りを行った。最後に全体に意見を発表する場を設けて、全体に共有した。

このように、本授業のアクティブラーニングで大切にしていることは、意見の交換と表明をする場であるグループミーティングやペアディスカッションを行うことである。またそれを授業の最後に全体に共有するという作業を繰り返すことである。グループの中でも能力差や意識の差はあることは当然である。自分の意見を主張し、他者を理解しながら、意見をまとめていき、実行していくことが大切であり、グループで決めたことはしっかり実行していくことが責務であるということを理解していく。

3.3 雨天時のグループワーク

雨天でコートが使用できないときには、教室で個人及びグループでのふり返りを行った。まず個人でこれまでの授業の感想と自己評価をプリントにまとめ、「こうしたらもっと授業がよくなる(楽しくなる)と思う提案」などのテーマを与え、記入させた(図1, 図2)。その後、ペアディスカッションからグループディスカッション、全体でのディスカッションと受講者の意見を引き出す場を設けた。次の授業がワクワクする内容を受講者で考え、共有し、以降の授業に反映させていった。さらに教室で行うと記録がしやすいため、文章で意見をまとめたり、他者の意見をメモすることも容易に行えた。普段は会話のやり取りで行って

ることを、活字として表現するというのも大切な一つの経験であった。

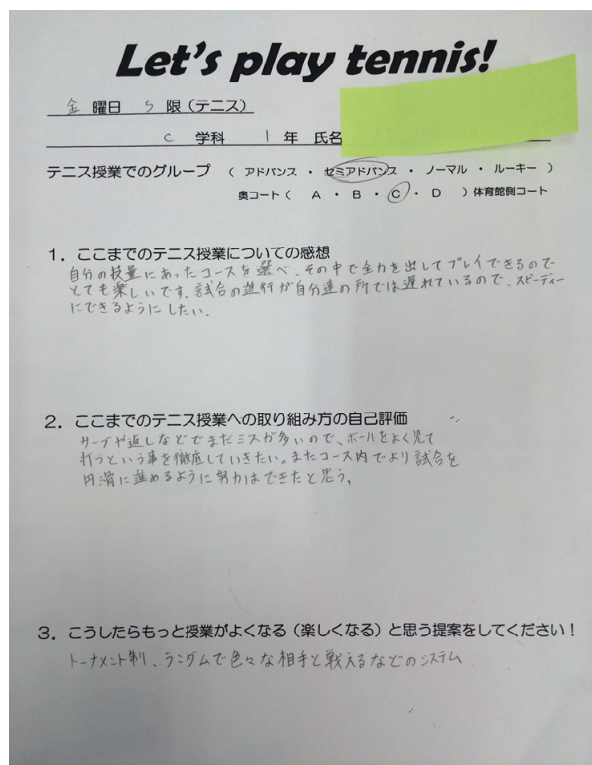


図1 グループワークでの個人シート①

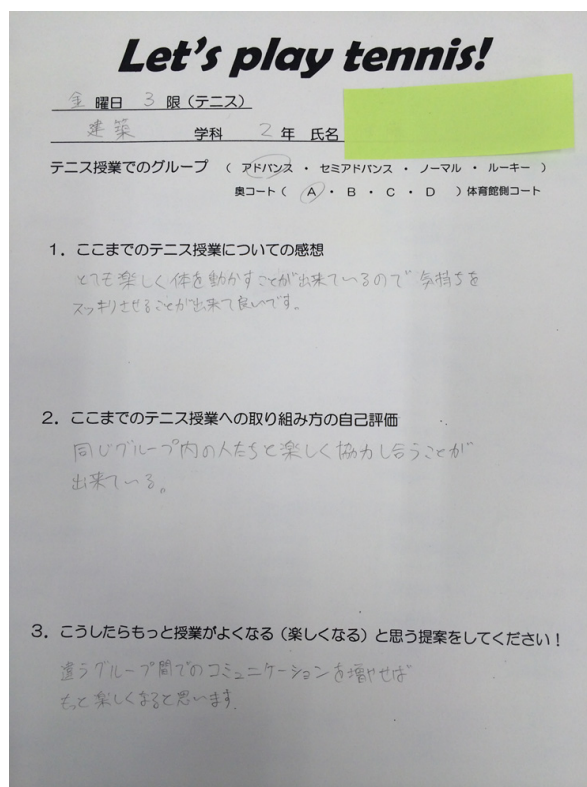


図2 グループワークでの個人シート②

4 課題と今後の展望

アクティブラーニングを行うには、学生の受動的な授業観を能動的に変えていく必要がある。事前に授業の進め方を話し、アクティブラーニングの目的、方法、身につく力などを学生に十分に知らせておくことが大切である。たとえ十分に知らせておいたとしても、上記の授業の中で、ディスカッションに積極的に取り組まない学生がいたり、グループミーティングでは意見を表明できない学生がいた。このような学生が存在することは現実であり、また教員が意図したように授業が進まなかったり、授業のまとまりがなくなってしまったりすることもあった。この点は課題である。

しかしながら、学生を根気強く見守り、寛容に進めていかなければ、アクティブラーニングは成立しない。強制や強引な進め方、また意見の否定をしては、決して意見や感想は出てこない。さらに、アクティブラーニングには決められた手順や方策はなく、形態、方法は無数にある。授業ごとにその受講学生や雰囲気、空気感は異なる。同じ時間の授業で同じ学生を扱っていても、毎回毎回の雰囲気やテンションは異なることが多い。その雰囲気と空気感を教員は敏感につかんで、アレンジしていく、多くの引き出しを持つということも大切である。

スポーツの授業は「生き物」である。何を学ばせ、何を意図し、その時間の目標は何かを明確に持っていたとしても、その時間の学生の動きに応じた臨機応変の行動が求められることが多い。一歩間違えれば学生の命をも落とすことになるため、安全は最優先事項である。その上で、安心して学生が授業に取り組めるよう配慮が必要となる。健康・スポーツ系科目は身体表現が伴い、自分をさらけ出す科目でもある。失敗をしても安心してその場にいることができる空気感が必要となる。そして、心も体も解放され、心身ともにリフレッシュして爽快感を味わうのもスポーツの醍醐味である。そのスポーツの醍醐味を学生に味わせながら、学生が能動的に授業をつくり、自立してスポーツに取り組む環境づくりが大切である。これらを追求しアクティブラーニングにおいて、授業のあらゆる箇所に仕掛けを作れば、おのずと社会人基礎力の育成は出来、さらに学生がワクワクして授業に来ることができれば、これが理想である。

5 おわりに

本発表では、授業の一部を紹介したが、授業の終わりにとった感想を紹介する。「上級者と初心者が一緒にできてよ

かった」、「同じレベルの人とたくさんやることだけでなく、いろいろなレベルの人とできて、技術的に学べた」、「様々な人の試合を間近で見て勉強になった」など肯定的な意見が多かった。一方で「リーダーになって人を動かすことが難しいと分かった」、「授業がだらけた時に、周りに何と言ったらいいのかわからなかったし、言う勇気がなかった」など自らのつまづいた経験を話した学生もいた。

学生にとっては、成功体験も失敗体験もすべて学びである。学生がこの授業の意図を理解するのに十分な時間も必要である。しかし、社会人基礎力の育成をめざしたアクティブラーニングの実践はこれからも重要視したい。

今後は、本授業をさらに発展させ、学生に役割経験を多く積ませ、集団活動における社会人基礎力のさらなる育成に努める。また、学生にアクティブラーニングや社会人基礎力に対する意識調査や、健康・スポーツ系科目に対する期待と評価を調査し、分析していく必要がある。

参 考 文 献

- 1) 経済産業省ホームページ
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>
- 2) 瀬上慎一 (2014) アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換. 東信堂. 小林昭文監修 (2016) 図解 アクティブラーニングがよくわかる本. 講談社. pp68
- 3) 文部科学省・中央教育審議会 (2012. 8.28) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/oushin/1325047.htm